

連載 立教学院諸聖徒礼拝堂聖別 100 周年

諸聖徒礼拝堂から読み解く、立教大学 100 年の歩み (1)

立教大学文学部キリスト教学科教授 加藤 磨珠枝

赤レンガ校舎群のひとつとして、池袋キャンパス創建当時の美しい姿を今に伝える立教学院諸聖徒礼拝堂は、1920（大正9）年1月25日に聖別され、今年でちょうど100周年を迎えました。これを記念して、2回の連載で、皆様と一緒にチャペル100年の歩みを振りかえってみたいと思います。

チャペル誕生にいたるまで

池袋に立教大学のキャンパス構想が立てられたのは、1910年にさかのぼります。当時、立教学院の校舎は築地にありましたが、1907年に「大学」として認可され、規模が拡大していくなか旧校舎が手狭となったため、学院総理であったヘンリー・タッカーが、新天地としてここに白羽の矢を立てました。

この新たなキャンパス計画は、中等教育以上の教育が求められはじめた当時の社会的風潮と、日本聖公会の発展とも相まって、教育、伝道活動の拠点のひとつとして期待されました。キャンパスの基本設計は、米国聖公会によりニューヨークのマーフィー&ダナ建築事務所に依頼されました。新校舎群の建設は、第一次世界大戦の影響などで中断されながらも、1916年に定礎式が、そして1920年1月25日の「使徒聖パウロ回心日」に、チャペルの聖別式が挙げられ、完成へといたったのです。

ここで、1914年の構想スケッチ（図1）と、1918年の完成間近のキャンパスの正面写真（図2）を比べてみましょう。塔を構えた本館（モリス館）を中心に、その両翼には、向かって右側（西）にチャペル、左側（東）に旧図書館（現メーザーライブラリー記念館）が配され、校舎の全体的配置、本館中央の特

徴的な塔や窓の形など細部に至るまで、マーフィー&ダナによる基本構想が、かなり忠実に生かされたことがわかります。

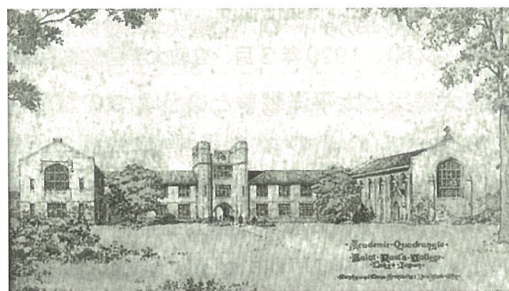


図1 マーフィー&ダナ建築事務所による「キャンパス構想スケッチ」1914年10月5日作成



図2 1918年完成間近の校舎建築群
（立教大学図書館大学資料室所蔵）

チャペル内部についても、1920年の完成時の写真（図3）から当時の様子が偲べれます。長堂式の空間は、南の入口から、北の祭壇へと中央通路がまっすぐに伸び、その両側には会衆の長椅子が前後に並べられていました。内陣壁の上部には大きなアーチ窓が開かれ、豊かな光が堂内に注ぎこんでいます。

特に注目すべきは、礼拝用の聖なる空間と会衆者たちを隔てる境界として設置された、見事な内陣仕切りです。階段で高められた内陣には、聖職者用の長椅子が向かい合う形で並べられ、さらに高い場所に置かれた主祭壇を焦点として、堂内は荘厳な雰囲気でもたされていました。



図3 1920年のチャペル（立教大学卒業アルバム（商科・文科）、1920年3月、立教大学図書館所蔵）

関東大震災と太平洋戦争という2つの試練

チャペルのその後を足早にたどると、1923年に関東を襲った大震災により、完成後間もないキャンパスは甚大な被害を受けました。その詳細は不明ですが、建物の壁や屋根は崩れ落ち、チャペルの修復には、建設費とほぼ同等の費用を要するほどでしたが、米国聖公会からの支援により、1925年には修復が完了し、その感謝礼拝が捧げられました。

当時の修復状況を確認するために、震災前後の写真（図3、4）を比較してみましょう。最初の屋根は切妻式で、祭壇上に大きなアーチ型の採光窓が開かれていましたが、震災後は耐震強化のため屋根は寄棟に改変され壁面が小さくなったことから、窓も小さな丸窓に変更されました（図4）。また創建当初は、レンガ積みがむき出しだった壁の上部は、震災後に白い漆喰で塗り固められ、堂内に白い漆喰壁と茶褐色の木材の対比が生まれました。



図4 関東大震災後（日米開戦前）（アルバム1939-1941年、立教学院史資料センター所蔵）

その一方、豪華な内陣仕切りや主祭壇、会衆席などに大きな変化はなく、震災後も元通

りに復元され、全体の印象は保たれています。

しかし、その後、チャペルは太平洋戦争というさらなる苦難の時代を迎えます。日米関係の悪化に伴い、北関東地方部主教と総長を辞任したライフスナイダーは、1941年7月末、同地区の米国人宣教師全員の離日を決定し、創設以来続いてきた立教学院と米国聖公会の関係は完全に断たれてしまいます。キリスト教主義の教育が困難になるなか、1942年にチャペルも「修養堂」と改称され、最終的には閉鎖の運命をたどりました。

当時の関係者によれば、チャペルは乾パンなど非常用食料保管所として使用される一方、内陣仕切り、会衆席などの内装は、空襲に備える防空壕の資材として解体されたそうです。確かに、日米開戦前のチャペル内部（図4）と終戦直後の写真（図5）を比べてみると、戦時下になにもかもが撤去され、魂が抜かれたかのようなチャペルの痛々しい姿が記録されています。空襲による破壊という最悪の事態は免れたものの、往時の美しい姿は失われてしまいました。

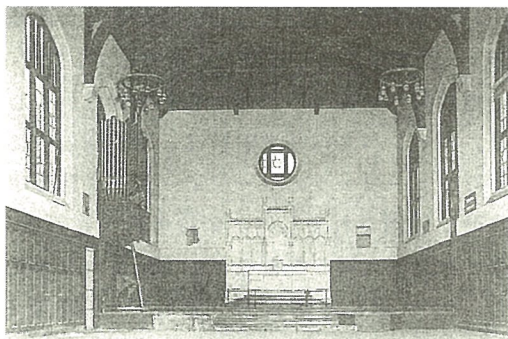


図5 終戦直後のチャペル（1945年10月20日付写真、米陸軍省通信将校長室資料より、米国国立公文書館所蔵）

1945年10月、礼拝堂の再開が理事会で決定されると、礼拝に集う人々によって再び活気が戻りましたが、チャペルがもとの状態に復元されることはありませんでした（図6）。その後、1998～99年にかけて、レンガ造りの建物としては国内初となる「免震レトロフィット工法」の改修工事により、耐震



図6 終戦後のチャペル(1947年5月26日付写真、米陸軍省通信将校長室資料より、米国立公文書館、No,SC-286800; Box134; RG111; NACP)

性が確保され、1999年には東京都選定歴史的建造物に指定されて、今日にいたります。

さて、立教大学のチャペルがどんな時代を生き、今の姿に至ったのか、おわかりいただけましたか？次号では、こうして受け継がれた聖堂建築に、一体どんな理想が込められていたのかを見ていきたいと思います。

[1月21日開催 RUM (Rikkyo University Mission) チャペル講演会より]